

令和元年6月19日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02080

研究課題名(和文) 占領期日本の接触空間と他者認識 越境する歴史認識の構築に向けた思想史的研究

研究課題名(英文) the Contact Zone as recognition of others in Occupied Japan- Research on the Intellectual History to building of border history recognition

研究代表者

長 志珠絵 (OSA, SHIZUE)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：30271399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、思想史研究としての「戦後の読み直し」という課題に、占領期像を組み込むことで、帝国の収縮や東アジア世界からの分断、接触領域の多元化、地域の女性史研究、戦争認識論などの成果との架橋を試みた。思想史の方法で言説のズレを抽出したことに加え、日米間あるいは国家間に偏りがちな占領期のアクターを地域の生活史研究へと広げるなど新たな方法論的視座を獲得できた。乱反射的な接触領域が形成される、多文化受容と摩擦の時代であり、帝国の記憶の変容と戦後日本の歴史認識にとっての占領期という観点を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が明らかにした点は、占領期認識を近年の史料発掘や調査で得た成果を通じ「戦後の読み直し」という学術課題に、占領期像を組み込むことで、帝国の記憶の変容と戦後日本の歴史認識にとっての占領期の持つプレゼンスを問い直した点であるが、地域の女性史研究、戦争認識論などの成果との架橋を試みるとともに、史料の持つ多様性や史料の発話の位置とそのズレ、言語間のズレなどアーカイブ思想史的な検討を組み込んだ点は戦後史の史料論としても社会的意義を持つと考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to investigate the history of Occupied Japan Era as the Contact Zone. Through new documents we found out contact space and cultural contact during the occupation period. As a result of this study, we gained a new perspective to the "Collective Memory" or "Public history" which closely related to Occupied Japan society and the Intellectual History.

研究分野：戦争と占領の記憶をめぐる文化研究、ジェンダー研究

キーワード：日本占領 他者認識 戦後女性史 アーカイブ論

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、「戦後」の読み直しを目指している。これは、近年での思想史や文化史研究が取り組んできた課題に対してアプローチを試みたものであるが、その際、本研究では、戦争認識研究や占領期研究の蓄積をふまえる、という方法的な新たな試みを行ったものであり、代表者がこれまで従事してきた占領期を帝国日本と戦後日本の歴史認識をめぐるターニングポイントと考える研究を発展させた試みである。

占領期をめぐる研究は、近年注目のあつまる「戦後」像に比べ、思想史歴史認識の学術対象としての言及は少ない、ということに注目した。この一方で、歴史文化研究の対象としての占領期研究は、2000年代前後での米国日本学研究所の思想文化史的潮流の研究や、旧来のオリエンタリズム的な日本像を批判した新たな政治文化研究の潮流においても、日米間の鏡像関係、非対称的な日米二国間関係を前提とする前提にあり、東京・占領初期に偏る傾向にあった。

## 2. 研究の目的

占領期のイメージそのものは、「戦後レジームからの脱却」といったような現実の政治課題に消費されがちであるが、改めて思想・文化研究としての検討が必要かつ可能な段階にあると考える。近年の文化研究では、ミリタリズムによるデミリタリズムの持つ構造的な限界に加え、戦争と戦後のあいだにあった、まさに休戦期としての日本占領期という世界史的な意味づけも明確になってきている。他方で、戦時下の日本社会へのアプローチが様々な領域で積み重ねられてきたことに対し、占領期とは戦後社会の記憶からほとんど抜け落ち、ことに、朝鮮戦争の前線となって再編された、占領後期での西日本の経験と記録は、戦後認識に位置づけられてはいない。本研究は、研究代表者が行ってきた戦争の記憶文化に関わる成果(例えばその成果の一部は『占領期・占領空間と戦争の記憶』有志舎、2013年、本文378頁)等をふまえ、占領期像を、帝国の収縮や東アジア世界からの分断、接触領域の多元化など、乱反射的な接触領域が形成される、多文化受容と摩擦の時代として再考し、新たな占領期認識カテゴリーの構築をめざす。

## 3. 研究の方法

上記の研究状況の一方、占領期研究は近年、資史料の整備や公開が飛躍的に進み、時空間をめぐる歴史認識の再考や多言語多形態の史資料分析が可能であるなど、これらをアーカイブ論もふまえたテキスト分析として「読む」方法を用いた。その方法は、米軍-日本政府-地方行政(米軍地方軍政部)-地域史料の重層的関係を解明し、出来事の記録の言説分析を通じて伝達通路を介した文言のズレ、解釈の変遷・共有を明らかにし、文献研究としての戦争の記憶論を構築する方法による。占領期をめぐる文献研究、とくに思想史的なテキストクリティークの方法に立つと、占領期の史料群は、日本の国内の伝達機関間であれ、多言語間であれ、文書の送信側と受信側のあいだにズレがあり、いわゆる間テキストとして読み解く可能性と魅力をもっている。こうしたこれまでの研究成果による見通しをふまえ、本研究では特に新たな方法的な試みとして、占領後期および西日本の都市の経験をめぐるテキスト群に焦点をあて、史料博捜も行い、思想史・文化史研究の新たな対象と方法の模索につとめた。

## 4. 研究成果

地方の占領をめぐる文化研究は本研究が着手する期間においても、様々な研究が急速に進んだ。文化研究においては、何を史料として考えるのか、アーカイブ状況も含め、その読み解きが改めて深化してきた状況にある。特に、現在での地域占領の文化研究としての歴史文献状況について、当科研期間中に刊行され、地域占領をめぐる文化史思想史研究の金字塔とでもいえる、西川祐子『古都の占領』(平凡社、2017)は、代表的な作品となり、本研究成果においても、公開研究会等、議論を重ねる機会を持ったが、同時に、同研究が立脚しているアーカイブ及びその利用可能な状況は、実は特異であるのも実情だ。通常、地域占領期を考えるうえで、「京都」ほど条件的に恵まれた場所はない。

こうした直近の先行研究の成果も意識しながら、本研究では、占領期を考えるうえでの基本的資料としてのSCAP文書、地域の行政資料としての県庁文書、雑誌研究としてのプランゲ文庫、地域新聞資料等ほか、社史などの多様な諸団体の刊行物に加え、米国国立公文書館の史料や文献、写真記録ほか、オーストラリア戦争記念館所蔵のBCOF史料も含めた記録資料、またこれらを収集してきた自治体史史料など総合的な史料収集の可能性やアーカイブ状況も含め、それらの史学思想史的状況もふまえ、言説分析を行った。また西日本を

中心に、朝鮮戦争以後での「駐留軍」像と隠蔽される記憶の事例にも留意する一方、イギリス連邦軍関係の資史料や経験、呉市史や鳥取県史などの自治体での作業や研究会との連携を強め、前者については、写真史料などの情報交換も行い、史料の対象を広げることで、占領期の時空間とそのアクターおよびその関係性を多角的にとらえたる作業につとめた。

これらを思想史研究が蓄積させてきたテキスト分析によって読み解き、空間論的転回以後の戦争の記憶を検討する手法によって、米国とその「典型的」従属者日本像を再考する作業を行い、アーカイブ論にふみこんだ史学思想史的観点もふまえた戦後認識としての占領期像の再考の可能性を提起した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 論文 長 志珠絵「史学思想史としての「女性史」序論-」(『日本思想史学』50号, 36~42頁, 2018.10、査読なし)
2. 論文 長 志珠絵「「防空」の帝国と本土「空襲」のあいだ」『日本史研究』643, 57~77頁, 2016.3 (査読あり)
3. 論文 長 志珠絵「「防空」のジェンダー-戦前戦後における日本の空襲言説の変容と布置-」『ジェンダー史学』11号, 2015.10, 21~35頁 (査読あり)

〔学会等発表〕(計12件)

1. 長 志珠絵「方法としての占領期神戸」(＜同時代史学会＞2018年度大会個人報告, 於 関西学院大学, 2018.12.10, 査読あり)
2. 長 志珠絵「占領期の地域史資料とGHQ文書」(鳥取県公文書館県史編さん室他主催＜占領期の鳥取を学ぶ会-30年度活動報告会＞ 於 鳥取市歴史博物館, 2019.3.9, 招請)
3. 長 志珠絵「思想史の場としての「戦後女性史」」2017年度日本思想史学会大会シンポジウム, 於東京大学, 2017.10.29, 招請)
4. 長 志珠絵「戦後日本史研究における到達点」(ジェンダー法学会シンポジウム2016年第14回学術大会 シンポジウムII「戦時性暴力と法 慰安婦問題と戦後補償」2016.12.4, 於 立命館大学朱雀キャンパス, 招請)
5. 長 志珠絵「「ジェンダー史資料の越境的可能性 -米国東海岸における日本学アーカイブとしてのプランゲ文庫」(科研費「感情労働の地域・階級間比較にみる「近代家族」, フェミニズム思想の越境性とその限界」課題番号 18H00702 基盤(B)代表 並河葉子研究会, 2018.9.11, 於 神戸大学梅田インテリジェントラボ, 招請)
6. 長 志珠絵「戦争認識への問いを＜試す＞＜開く＞ということ」(立命館史学会2016年度大会, 2016.12.10, 於 立命館大学衣笠キャンパス, 招請)
7. 長 志珠絵「「空襲」イメージがはらむ記憶の国境線 帝国の防空とその記録・記憶」(戦争社会学会第7回大会パネル報告, 2016.4.24, 於埼玉大学, 招請)
8. 長 志珠絵「帝国の防空と空襲のあいだ」(日本史研究会2015年度大会個別報告, 招請, 2015.10.10, 於京都大学)
9. 長志珠絵「戦後言説のなかの「慰安婦」問題/「慰安婦」問題をめぐる1991年以前」女性・戦争・人権学会2015年度大会報告, 招請, 於同志社大学, 2015.10.25)
10. 長志珠絵「歴史展示とジェンダー」国立歴史民俗博物館主催国際研究集会, 2017.7.2, 於国立歴史民俗博物館招請)

11. Shizue.Osa : Disposition and transformation of discourses on ' international marriage ' : Understanding theories on race and racialization in modern Japan、仏社会科学高等研究院 ( EHESS ) と京大人文研によるTEPSISシンポジウム、パリEHESS、2018.3.11,招請)

12.長 志珠絵「占領期研究のための「神戸」」(ワークショップ報告, 2016.6.15,9.於 オーストラリア国立大学アジア太平洋研究所セミナー)

13.Shizue.Osa : Air defense or Air bombing --what do you remember? ' ec2 Comparative Postwars: Remembering and Forgetting,2016.10.22,米国コロンビア大学

〔図書〕(計6件)

1. 共編著 長志珠絵他編,地域連携事業成果報告書『神戸から・神戸へのがみー疎開児童と家族の1945年』本文80頁,2019.3

2.共著 坪井秀人編『敗戦と占領』(シリーズ「戦後日本を読みかえる」臨川書店,2018.6, 288頁のうち161~208頁、長 志珠絵 論文「脱「兵曹文化」への模索-軍港都市・佐世保にみる占領と駐留のはざま-」)

3. 共著、北澤満編『軍港都市史研究 佐世保編』(清文堂出版,2018.2,本文364頁のうち、165~222頁、長 志珠絵 論文「せめぎあう「戦後復興」言説-佐世保に見る「旧軍港市転換法」の時代」)

同上 長 志珠絵 コラム「米軍家族住宅論」223~225頁)

4. 共著『日本生活史辞典』吉川弘文館,820頁,2016.10

5. 共著『記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争』岩波講座アジア太平洋戦争補巻,2015.7)本文290頁、6. 共著『同性愛をめぐる法と歴史』明石書店,2015.9, 本文317頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。